

月ノ木貝塚・へたの台貝塚周辺を歩く

千葉市の遺跡を歩く会

都川の支流である仁戸名川（支川都川）の下流には月ノ木貝塚、へたの台貝塚、道免貝塚、高崎台貝塚といった縄文中期～後期の貝塚があります。5000年前～3000年前に繁栄したこの地を訪ねて、彼らの暮らしや、彼らの生活の智恵を想像します。

1. へたの台貝塚（縄文中期・後期）　　《 図 2 》

- 直径約 100mに範囲に、点在貝塚が十ヶ所程度存在する貝塚。
- 標高 25mの舌状台地先端に位置する。水田との比高差は 14m。
- 阿玉（おたま）式土器、加曽利E式土器、加曽利B式土器が出土することから、縄文中期～後期の遺跡とされている。
- 貝層はイボキサゴ、ハマグリが主体。
- 1988年、西の谷の市道が整備される際に台地斜面の小規模発掘調査が行われ、縄文中期竪穴式住居 3軒、古墳時代住居址 3軒が発掘された。へたの台貝塚がある舌状台地は縄文時代から古墳時代に住宅街として使用されたことがわかる。
- 小支谷をはさんで月ノ木貝塚という大型貝塚があることから、へたの台貝塚は縄文中期に住宅街として使用されたのではないかと想像したい。（加曽利北貝塚が形成された縄文中期に加曽利南貝塚付近が住宅街として使用されていたことを連想する。加曽利南貝塚が縄文後期に大型貝塚に発展したのとは異なるが。）

2. 月ノ木貝塚（縄文中期、後期）　　《 図 2、図 3、図 4 》

- 南北 200m、東西 150mの大型馬蹄形貝塚。
- 標高 25mの舌状台地の先端にあり、仁戸名川がある北に馬蹄形の開口部がある。
- 南端は北端より高く、標高差は約 3m、貝層の厚さは 1.2～1.4m。
- 中央部には貝層がなく、遺構もない。1951年に発掘した武田氏は、人工的に「掘り下げたもの」と推測している（最近、縄文時代に土木工事が行われたことが、幾つかの遺跡の地質調査結果をもとに報告されている）。
- 貝層の上部、下部はハマグリとアサリが比較的多く、中央部はイボキサゴが多い。ハマグリは小型のものが多く。乱獲されて、大型のものが少なかったとの説もあるが、2～3才のものが一番おいしいからという説もある。直径 2cm程度のイボキサゴは身を食べるのが目的ではなく、スープの出汁をとるために獲ったのではないかとされている。
- イノシシの牙のペンダント、土製耳飾り（ピアス）、イモガイの腕輪、タカラ貝などの装飾品が出土している。イモガイ、タカラ貝は暖かい地方に棲む。縄文中期の気候は若干寒い時期もあったが、ほぼ今の気候と同じであったことから、房総半島先端の海岸で採取したものと想像される。そこまで航海する技術を持っていたことがわかる。
- クジラの脊椎骨が出土し、海岸に自然に打ち上げられたクジラを都川沿岸のムラムラで分けて食べたか、追い込み漁を行う技術を持っていたものと想像する。
- 骨製のヤジリ、漁猟道具が出土している。
- 石器の出土は少ない。出土された石皿はもろい砂岩のもので、石器を手に入れるのが難しいムラであったとも想像できる。（代わりに骨製品が多い）

- 1951年に発掘調査された竪穴式住居跡を図4に示す。
 - ① 4軒の竪穴式住居跡が確認された
 - ② 加曽利E式土器が出土 → この住居は縄文中期中葉に作られた
 - ③ 深さは1.5m程度（加曽利貝塚公園にある復元住居に比べると深い！）
→月の木貝塚の住居は縄文中期の寒冷気候を凌ぐため深かったと武田氏は想像
 - ④ 広さは25㎡程度 → 15畳。ちょっとしたリビングルーム。
5～6人が住んだと推測
 - ⑤ 中心付近に炉がある。煙は屋根中央部から排煙したと武田氏は想像。
 - ⑥ 萱や樹皮で屋根を葺いたと武田氏は想像。4本の比較的太い柱で屋根を支える。
 - ⑦ 外周に比較的細い壁柱らしき浅い垂直な穴がある。小輩は低い壁があったと想像。壁構造は縄文後期以降、時代を経るにつれて発展する。日本在来工法の柱構造の起源は竪穴式住居とされているが、壁構造が竪穴式住居の主流だった時期もあった。
 - ⑧ 他県には、湿気対策として灰や石を床に敷いた例もあるが、千葉にはない
→ 草、布などを床に敷いたと武田氏は想像。アンギン（編布）はカラムシなどの植物繊維を紡糸して、太いヒモに撚ったものを編んで作った布。縄文時代低湿地遺跡からは多くのアンギンが出土している。布を作る技術を持っていた。
- 加曽利E式土器（小輩が作成した復元土器を見ながら説明）
 - ◇ 縄文土器は「素焼き」。単なる素焼きは水が漏れ易い。縄文土器は「磨き」により、水が浸透する空隙を細かい粒子で充填して、水が漏れない構造を作っている。
 - ◇ 縄文人はこの技術に満足して、1万年以上縄文時代が継続した。
 - ◇ 中国人は、焼成温度を1000℃以上に上げることによって、粘土鉱物が部分的に熔け、焼き物が強くなるとともに、ガラス状物質（ウワグスリ）で空隙を充填させる技術・「陶器」製造方法を発明した。
 - ◇ 与えられた条件の中で最高の技術を発揮するという日本人の性質は縄文人のDNAに由来するのではないか。技術の水準をそれ程高めることができない風土で、変わった考え方を受け入れるような環境があると、イノベーションが生まれるのではないか。・・・というようなことを、土器を見ていると考えます。
- 1000～2000年間住み続けた理由として、次のことが上げられる（1953年千葉市誌）
 - ① 湧水がある
 - ② 舟着場がある
 - ③ 付近に狩猟に適する場所がある
 - ④ 外敵（けもの）の侵入が困難である
 - ⑤ 土器製作に必要な粘土がある

3. 道免貝塚（縄文中期、後期）

- 仁戸名川沿岸にある貝塚。
- 低湿地遺跡であり、発掘により木製道具、竹カゴ、布製品などの出土が期待されるが、発掘されたこともなく計画もない。
- へたの台貝塚などの住人が丸木舟を利用して魚介類を獲りに行ったと想像される。

4. 高崎台貝塚（縄文中期、後期）

- 坂月方面から流れてくる都川本流と仁戸名川が合流する地点の台地上にある貝塚。
- 点在貝塚。住居が存在し、日常食べていた貝を住居跡などの窪みに廃棄した跡。
- 現在でも付近に豊富な湧水がある。
- 隣接する千葉市緑化植物園には星久喜貝塚もあると資料に書かれているが、星久喜貝塚は貝層が露出している部分がなく、観察は難しい。

以上